

### 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990600116		
法人名	社会福祉法人大恵会		
事業所名	グループホームみょうじん		
所在地	栃木県日光市明神1000番地1		
自己評価作成日	令和3年10月5日	評価結果市町村受理日	令和3年12月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 [www.wam.go.jp/wamapp1/hyoka/003hyoka/hyokanr.i.nsf/aHyokaTop?0](http://www.wam.go.jp/wamapp1/hyoka/003hyoka/hyokanr.i.nsf/aHyokaTop?0)

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 栃木県社会福祉士会		
所在地	宇都宮市若草1-10-6 とちぎ福祉プラザ3階 (とちぎソーシャルケアサービス共同事務所内)		
訪問調査日	令和3年10月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

コロナ禍で外出が出来ない状況であるため、庭に畑を作り野菜を育てています。畑があることにより、育てる楽しみ、収穫する楽しみ、作る楽しみ、食べる楽しみを感じてもらい、外出できないストレスを軽減できればと、取り組んでいる。  
毎月発行している広報誌を家族に送り、施設内で行ったイベントの写真を掲載することにより利用者の元氣な姿や様子を定期的に知らせている。個人ごとにその月の様子なども一緒に送付している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

年2回、事業所の向かいにある養護老人ホームと合同で火災を想定した防災訓練を実施している。事業所単独では、夜間や地震を想定した訓練を実施している。災害時の備蓄は3日分蓄えている。食事の場面では、利用者も可能な範囲で調理や後片付けなどを手伝っている。献立は職員が作成して手作りの食事を提供している。また、事業所の畑で取れた季節の食材を取り入れて提供することもある。入浴は利用者と職員の1対1で対応している。入浴は、その都度お湯を入れ替えて、入浴する方の好みの温度に調整している。年2回、職員向けの身体拘束アンケートを実施し、不適切な介護や虐待行為、身体拘束、スピーチロックなどを未然に防ぐ取組みが行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが ○ 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員会議で理念の周知、事務分掌で役割分担を実施。	事業所の理念「丁寧な言葉遣い」「個人の尊重」「利用者の希望に沿った支援」を毎月発行の事業所通信に掲載している。また、玄関に誰もが気づくように掲示されている。理念は職員会議などで相互確認を行い、日々のケアに繁栄させている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	認知症カフェを受託し運営。 ※感染症対策のため前年度は11月に1回、今年度は未実施となっている。	地域の老人会の人たちが、事業所周辺の草刈りなどを行っている。コロナ禍以前は、地区の公民館で、認知症カフェを地域のボランティアの協力で行っていた。	新型コロナウイルスの感染が終息した際には、感染対策を十分に行い、認知症カフェの再開を期待します。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェ実施の際は相談ブースを設置し、地域包括へ相談をつなげた。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議でいただいた意見も参考にしながら事故防止に努めている。 地域のニーズや実状の意見をもらい、今後の認知症カフェの開催の形式を検討した。	運営推進会議は感染症の状況を見ながら開催している。利用者・家族や地域の方、民生委員、市の職員、グループホーム職員が参加している。事故や行事などを報告し、参加者の意見を貰い支援に反映させている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営に関し不明なことがある際は、その都度市担当者とは相談を行っている。	市には事故報告や相談を行っている。令和3年度介護保険制度の改正では市に相談し、ケアサービスが問題なく取り組めるようにしている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束のアンケート実施、結果の考察を行った。職員会議で話し合いを行い、グループホーム入口のセンサーの撤去、見守りセンサー、徘徊センサーの使用の見直しを行った。	年2回、職員向けに身体拘束アンケートを実施し、不適切な介護や虐待行為、身体拘束、スピーチロックなどを未然に防ぐ取組みが行われている。センサーマットなどの使用は、身体拘束にならないか検証して使用している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待についてのアンケート実施、結果の考察を行った。職員会議で不適切なケアについて行われていないか話し合いを行っている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員に権利擁護推進委員養成研修の修了者もいるが制度の理解と活用はできていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は本人、家族に伝わる言葉で説明することを意識し、疑問や不安な点の聞き取りを行い契約を結んでいる。 契約の変更の際には説明を行い、理解、納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の開催時、利用者家族も評議員として参加し事業所運営に反映している。通院や面会で来所した際に事業所での出来事などを伝えながら頂いた意見を反映させている。	家族からの要望は電話などで意見を聞いている。コロナ禍で家族の面会ができなため、ガラス越しやリモートでの面会になっている。利用者からは帰宅願望など聞かれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回職員会議、週1程度カンファレンスを開き、職員の意見や提案を開く機会を設け、話し合いを行いそこで決めたことを業務に反映させている。	週1回のカンファレンスで職員の意見を集約し、ケア・運営に反映させている。年2回、管理者は職員面接で意見を聞き取り、運営改善に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に1回、全職員を対象に「職員意向調査」を行い、組織における個人の役割や目標を明確化にさせ、職務意欲や健康状態などを把握し、これを基に事務分掌、役割分担を行っている。		
13		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	それぞれの目的役割に合わせ研修に参加出来るよう努め、資格取得費用の補助を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	法人内で同職種の意見交換、研修を行っている。例年は市内の介護サービス事業者と相互交流を行い、認知症カフェについては年2回「連絡会」を実施し、それぞれの事業への取り組みやその問題点について話し合う機会を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	これまでの生活歴を考慮しながら、傾聴やコミュニケーションを積極的に行うよう心掛け、少しでも安心して生活していける様、他入居者を含めた関係づくりに努めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人、家族から話を聞き、生活での要望や考え、家族間での思いの違いがないか確認をしている。信頼関係が築けるよう気を付けている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	開始前の聞き取り調査で本人の状態、家族の状況を把握。 必要なサービスについてケアマネを中心に職員間で話し合い、介護計画を立てサービスの提供している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者様それぞれに可能な事(洗濯たみ・食器洗い・食器拭き・掃除など)は役割として行ってもらい、お互いが感謝し合い支えあう関係づくりに努めている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の状況を定期的に報告し、電話等家族といつでも連絡が取りあえるような関係を築き、家族が支援できる部分は協力してもらい一緒に本人を支えていくよう努めている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症対策で外出は控えてもらっているが、電話や手紙などで昔の職場の人や、友人と連絡が取れるよう支援している。	携帯電話を所持している利用者の方は、家族や友人と連絡を取っている。所持していない利用者は希望があった場合、グループホームの電話で対応している。また、友人や家族と手紙の交換が行われている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者とのコミュニケーションの中で利用者同士の関係性を把握し、食堂の席など配慮している。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後もこれまでの関係を大切にし必要に応じて相談や支援ができるよう努めていきたいと思う。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いやりや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は利用者との対話や表情、行動などで本人の希望を把握しようと努めている。その得た情報はケース入力し職員間で共有している。	利用者との日々の生活の中で、利用者の希望を聞き取り、可能な範囲で本人の望むケアを提供している。意思疎通が難しい利用者は、表情や行動を汲み取り、ケアに反映させている。		利用者の意向が実現できるよう、家族の調整や事業所の体制作りに期待します。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	基本情報や家族からの話、本人との対話等から一人ひとりの生活歴の把握に努めている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一日の過ごし方でいつもと違う行動をとった時などその人の状態を考えて声掛けすること、状況に合ったケアを心掛けている。また、そのことを職員間で共有している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員会議等で一人ひとりの課題を話し合い、今後のケアについて本人や家族、ケアマネジャーなどの意見も取り入れるよう努めている。	本人や職員の意見、家族からの具体的な要望を取り入れて、ケアマネジャーが介護計画を作成している。月1回モニタリングを実施し介護計画を確認している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	一人ひとりの様子を記録、気づいた点、普段と違う行動の時の様子などは、職員間で共有しケアの見直しができるよう努めている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療連携で市内の病院、歯科の居宅療養管理指導などで健康管理に努めている。急な受診や身の回り品の準備など必要時は事業所に対応することもある。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	例年であれば地元長寿会と定期的に交流を図っているが感染症対策により現在が行われていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	医療連携により看護師の定期的な体調確認、変化がある場合は職員も同行して受診を行っている。	入居前からのかかりつけ医に家族が付き添って受診している。家族の付き添いが難しい場合は、自費サービスを利用して事業所職員が通院の付き添いを行っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設の小規模多機能の看護職員と医療連携の看護師の定期的な体調確認、受診の必要性などの判断を医療職と連携して行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。また、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療機関へ定期的に状態の確認を行っている。退院の際はカンファレンスで注意事項の確認を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りまでは行っていないが、意向を常に確認し、重度化しても事業所での生活を希望される場合、かかりつけ医、医療連携と連携しながらケアを行っている。	当事業所では看取りの対応は行っていないことを利用者・家族に伝えている。契約時と毎年4月に家族・本人に対して重度化した時の意向調査を行っている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルに基づき、状況に応じて対応できる体制を整えている。急変の際は併設事業所の看護職員の協力を得て対応している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	地元自治会、消防団と「災害等相互協力書」を取り交わし事業所が行う消防訓練への地元の参加協力（感染症対策のため現在のところ事業所内で行っている。）、無断外出などの際の協力、自治会内で災害が発生した時の被災者の事業所への受け入れ体制を取っている。	年2回、事業所の向かいにある養護老人ホームと合同で火災を想定した防災訓練を実施している。事業所単独では、夜間や地震を想定した訓練を実施している。災害時用の備蓄は3日分蓄えている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	事業所の理念に沿ってひとりの支援を心掛け、言葉かけも職員間で注意して対応している。	利用者への言葉遣いは丁寧語で対応している。不適切なときには管理者が注意している。排泄介助や入浴介助では、プライバシーに配慮してケアが行われている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	事業所の理念に沿ってその人中心の支援を心掛けている。レクリエーションの参加や内容なども選択できるよう配慮している。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入浴やレクリエーションの参加を本人に確認して行っている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に理髪店に出張してもらい整容に努めている。また、家族様に協力していただき清潔な衣服を準備している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の食材を使うことに心掛け、四季を感じ会話が弾むよう心掛けている。片付けなどはできることをしていただいている。	利用者も可能な範囲で調理や後片付けなどを手伝っている。献立は職員が作成して手作りの食事を提供している。また、事業所の畑で取れた季節の食材を取り入れて提供することもある。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスに注意し、拠点にある施設の管理栄養士の意見なども聞きながら献立を作成している。摂取量・水分量を記録して健康管理に努めている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科による居宅療養管理指導を受け口腔ケアを実施している。食事前の口腔体操も取り入れている。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	おむつ内に失禁がある方も日中はトイレでの排泄を促している。排尿排便のパターンを記録して把握している。	日中はリハビリパンツとパットを使用して、トイレでの排泄を行っている。一人ひとりの排尿・排便記録から、パターンを予測してトイレ誘導を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	献立の食材には食物繊維の多いものを使用し、水分補給も心掛けている。また、自然排便を心掛け適度な運動も一緒に行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	その人の入浴日には時間帯など選択してもらい、お湯の温度などもその人に合わせて調節している。	入浴は利用者と職員の1対1で対応している。その都度お湯を入れ替えて、入浴する方の好みの温度に調整している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	介助が必要な利用者は安眠できるよう室温やかけ布団の調節をしたり、むくみがある方は足を挙上して安眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬セットの手順や内服介助の手順のマニュアルを作成し、誤薬、飲み残しが無いように努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食後の食器拭きや朝夕のカーテンの開け閉めなど入居者様に行っていただいている。毎月季節を感じる行事イベント事を催し、楽しんでいただける内容をその都度検討している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	現在は感染症対策で病院受診以外の外出は控えているため我慢させてしまっている。	コロナ禍以前は洋服の購入や外食などで外出していたが、現在は事業所の周辺や運動公園まで車両で移動して、散歩を行っている。	



自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	以前は一緒に買い物に行く支援等も行っていましたが、現在は希望の品物を聞き、家族にお願いするか、家族と相談し預り金にて職員が購入するなどしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	個人で携帯電話を持っている方は自由に電話をしている。 手作り年賀状の支援をしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共同スペースには季節感を取り入れた飾りを手作りし装飾している。また、個人の居室は馴染みのものを置き心地よく居られるよう工夫している。	事業所のリビングには採光がたっぷり入り、明るい雰囲気である。また、季節の花が飾り付けされたり、ソファを配置したりして、過ごしやすい空間となっている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにソファを置き、休憩や他者と雑談できるように配慮している。また、キッチンには椅子を置き手伝いや、職員と話ができるよう工夫している。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には馴染みのあるものを置き、家族の写真や思い出の写真などを飾り本人が心地よく過ごせるよう工夫している。	居室の表札を手書きにして、利用者に覚えてもらえるようにしている。自宅で使用していた馴染みの家具などを持ち込むことができる。写真などを飾り付けして、利用者が心地よく生活できるようにしている		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室に表札を付けて自分の部屋と理解できるよう工夫している。また、その人の生活に合わせ動線の確保や家具の配置にも配慮している。			